

人生の贈りもの わたしの半生

作家

江上剛(61)

1

銀行員から転身「人生に無駄なし」

——都銀マンでキャリアを積み、銀行経営を舞台にした小説が多い江上さんですが、ふるさと自然豊かな土地なんでしょう。

サラリーマンの世界は効率重視でしょ。なるべく無駄を省く。でも小説家になってみると、人生に無駄なものなんてつもないと思います。棄てたいこと、すべしこと、苦しいこと、すべてが糧になる。出身地は兵庫で生まれ、27年に姉。僕は末っ子で、土地の言葉で言うと「おとんほ」です。

——実家は農業ですか。いや、林業ですよ。復員した親父が、俗に「バタコ」と呼んでいたオート三輪を買い、入山権を手に入れて始めました。仏様に供える檜や神事を使う檜、クリスマスツリー用のモミの木と切り出し、大阪や神戸に売りに行く。徐々に商売が大きくなって現金収入はあったんですが、祖父が大きな借金を作っていましたね、資金繰りに苦労していました。ときどき郵便受けに他の郵便と色の違う封筒が入っている、融資返済の督促状なんです。幼いころ、姉にこう言われました。「大きくなって銀行員にはならないでね。誰もお嫁さんに来てくれないから」

——家族は。父親は15年生まれで、長男なのに18歳志願して、呉(広島県)の海軍に入った。計算すると昭和18年ごろになりますが、入隊したら支給される軍服も軍靴もポロポロだったそうです。それで「ああ、負けるんだな」と思ったそうです。一緒に風呂に入ると、上首にやられた傷があらぬちにあつてね。小学校で僕はクラス委員。朝礼などで日章旗をおける係をやりましたが、親父は祝日でも旗をあげない。うちには日章旗がないかと思って探したらあるんですよ、たんすの奥に。きれいにたんであった。そつと親父でした。

——お母さんは。小畑村は丹波ですが峠をひとつ越えるると、もう播州の牧野という土地。母はその生まれです。父親を早くに亡くし、頼りにしていた兄も親死したそうです。縁あって親父のところに嫁いできました。が、親父と違って音楽や芸事に触れるのが好きな人でした。娘時代は映画や芝居を見ては、最初から最後までずっと再現して友達に話してきかせたそうです。この夫婦に戦後の昭和24年、まず僕の兄が生まれ、27年に姉。僕は末っ子で、土地の言葉で言うところ「おとんほ」です。



子ども時代は戦後日本の高度経済成長期と重なる。「テレビや冷蔵庫。電器屋さんが連日配達に飛び回っていたのを覚えてます」

堀英治撮影

人生の贈りもの わたしの半生

作家

江上剛(61)

2

高校時代に戯曲 揺るぎない存在求め

——少年時代から小説がお好きだったのですか。田舎ですから外で遊ぶことが多かったんですが、活字を読むのは好きでしたね。うちの神戶新聞と丹波新聞の2紙をとって読んで、分かる範囲で読んでいました。小学生新聞、中学生新聞かなあ、子ども向けのものも、とっついても。図書館にも通いました。当時、小学校の図書館は低学年だと騒ぐので入れてくれない。でも僕は静かに集中しているので、早めに入れてもらっていたんです。子ども向けの名作全集や、今昔物語を読んだことを覚えてます。

——書く方はどうでした。読書感想文は書きました。賞をとると副賞でノートがもらえるから。ノートはしきりに書いてました。俳句もやりましたね。小学生が中学生が忘れてましたが、野球少年でしたのね、「青空に 舞う白球」に「一直線」だったかな。子ども向けの新聞に投句して入選しました。僕は本名、小嶋勝喜。それで「晴天子」という俳号を自分で考えました。

——早熟ですね。そうですかねえ。感受性が妙に強かったかなあ。ひとつのことに夢中になるんですよ。ホタル狩りに行ったら、一心にホタルを見つめていて自販車が近づいてくるのに気がつかない。そのままはねられたことがありますよ。よく人だまも見ました。いや笑うけど、田舎ではみんな見ましたよ。余計な明かりのない星の降るような夜空で、屋根のあたりには人だまが出る、ああ、あそこのおぼあちゃん、亡くなったんだね、と。そんな会話をよくしました。



中学時代は野球部。キャッチャーで、すわったままで塁送球できるほど肩は強かったという。自宅前の新堀りの「ま」本人提供

堀英治撮影

人生の贈りもの わたしの半生

作家 江上剛 (61)

③

どの色のヘルメットもかぶらずデモへ

— 大学は早稲田ですね。ええ。第一志望は京大だったんです。でも、それを言ったら親戚中が集まってきて、頼むから京大だけはやめてくれと言った。大学入学は1972年ですが、当時は京大ババルチザンという過激派のイメージが強かったんですね。僕も数学が苦手という弱みがあったので、京大の試験を受けた直後に、ダメだと思った。案の定落ちました。親戚一同が喜びましたね。それで早稲田の政治経済学部に行ったんです。たしか願書は母親が出したはずですが、これも難しいところだから、受けなさいといった。— 最初に講義は聴いたのですか。

— 入学後、登録した講義は一通り出席しましたよ。1回ずつ。その後は、まったく出なくなっちゃった。全部大学側の授業で、くだらないと思っただけです。クラスメートの仲は良かったんですが、革マルと民青と、両方のシンパがいて、しよっちょう論争してましたね。入学の年の秋に文学部の川口三郎君が、中核と誤認されて、革マルに殺された事件が起きた。安保闘争の失敗から内ゲバに走っていた時代です。

— 結局、京大ならぬ早稲田でも、デモに参加することになるわけですか。参加はしたけれど、どのセクトにも属さなかった。実存主義の延長じゃないけど、あくまで個人として来たんだという思いでした。1年生のときには、10・21の国際反戦デーに行きました。日比谷公園に各セクトの色とりどりの旗が並んで、美しいなと思っ

た覚えがあります。連れててくれた友だちが「ヘルメットをかぶれ」と言うんだけど、僕は「どの色のヘルメットもかぶらない」と断ったよ。よく考えたらヘルメットなしじゃ危ないんじゃないかと、いざ公園を出ると、あつとついで間に機動隊に囲まれて、盾でつかれまくりましたよ。必死でしがみついていると、そのうちに誰かが放り投げたんでしょう、どこかのセクトの旗が竿ごと飛んできた。それ、うっかりつかんじやった。その瞬間に頭に浮かんだのは「凶器準備集合罪」の7文字。あれ、武器になりまさらね。やっぱり後に銀行員になる資質というか、危機回避の思いが瞬時にあらわにあらわにあらわなりました。『妹妹ベト』を読んで、それから機動隊員が近づいてきて何読んでるんだというから見てやると、うろたえ、それは良いね。そういうのを読むのは良いね。どうも書名から勝手にボルノ小説と勘違いしちゃうんです。— 結局、京大ならぬ早稲田でも、デモに参加することになるわけですか。参加はしたけれど、どのセクトにも属さなかった。実存主義の延長じゃないけど、あくまで個人として来たんだという思いでした。1年生のときには、10・21の国際反戦デーに行きました。日比谷公園に各セクトの色とりどりの旗が並んで、美しいなと思っ



早稲田大4年のころ、キャンパス内。このコートばかり着ていて、ときには毛布がわりにして愛用したという
— 本人提供

人生の贈りもの わたしの半生

作家 江上剛 (61)

④

ストリップ劇場をルポ 世界広がった

— 大学時代は書いていたのですか。ガリ版刷りの同人誌「蒼の檻」というのを発行してました。下宿の近所の本屋さんに置かせてもらって、いや、売れやしませんよ。東京・東久留米の山本書店というところが、そこには本当にお世話になりましたね。山頭火の句集や、井伏鱒二の全集。他にも読みたいものがあるよ、と、まず渡してくれて、あとでバイトで稼いで支払う。あれどとき払いの催促なんです。東京もまだ人が人を信用してくれなかった時代でした。

— アルバイトは随分やりましたか。色々やりました。おもしろかったのはストリップ業界紙のライターです。「芸報ジャーナル」と言って、初代浅草野太夫のご主人、佐山淳三郎が編集していました。たしか後に浅草フランス座の支配人である、旅芝居の一座が好きなで、役者が白塗りのままポンヤリたはこをふかしているのを、すつと見ていたりした。そうして芸能への憧れの記憶があつた。上京してまずのそいたのが渋谷のストリップ劇場です。そこで見た芸報ジャーナルに「ルポ原稿募集」とあつたら、送ったら採用されたのが始まりです。

— 驚いたんですが、学生時代に井伏鱒二さんに何度も会われているんですね。僕は文学部教授のゼミをとって、先生の「黒い雨」を研究テーマにしていたんです。レポートを書いたときに思い切つて電話したら、なんと先生本人が電話に出られて「まあ来なさい」と、先生は交流のあった太宰治の思い出を話された。「身動きも思わなくて書いているんだよ」とおっしゃった。文化勲章を受けたあとには宰相相手に気さくに接していただきました。

— 若い人は、とにかく古典を読みなさいと言われましたね。ブーシキ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー。先生は早稲田の公文なだけに、なせかロシア文学をあげられて。先生の郷里、広島のお酒を出す。なじみの居酒屋にも連れていっていただきました。大学を4年で卒業できなかったって留年が決まったときも、あいつに伺いましたね。

— 氣ますいですね。郷里でとれた松茸をお土産にうかがったんですが、先生は「これは君の就職が決まったら、そのときに食わせようとおっしゃった。1年後、ようやく仕事が決まっつ報告にうかつたとき、先生は、あのときの松茸を佃煮にして待っていてくださいました。うれしくて号泣しました。

— 聞き手・小林伸行 11全10回



大学時代、同級生とともに、学校を中退して兵庫県の寺で僧籍に入った友人をたすねたとき一枚、本人は左端、理髪館を聴いたことを覚えてる
— 本人提供

人生の贈りもの わたしの半生

作家 江上剛(61) ⑤

「金融を誤解」先輩から丁寧に教わった



銀行への就職が決まって、兵庫県の高尾温泉に親子で旅行した。本人中央。旅費は父親が払ってもちろだが、入行して最初の賞与で、両親を六甲山に連れて行った

——1976年に大学5年生。就職先を探すのは大変でした。第一次石油危機の後で、就職難でした。でもモロトリアムというか、組織の歯車になりたくないという気持ちが強くて、なんでもアルバイトで暮らしていました。すると心配したクラスメートの紹介で、第一勧業銀行にいる早稲田の先輩が会ってくれることになったんです。10月かな。土曜日でした。義理は果たさないとはいけないと思って、本店まで行きましたが、やはり気が進まない。それで土曜は窓口がお昼に閉まるから、その直後に電話しようと思った。やる気はあったんだけど、うっかり間に合いませんでしたという形をとれば良いんじゃないかと思ったんです。

——電話しましたか。 ええ。すると誰か出るんですけど。当たり前です。店はシャッター閉めても行員はいから。それで来ないと言われた。面接してくれた先輩は商学部卒で30代くらい。のちに専務になる方ですが、この出会いが良かった。「うちに入りたいたいか」「基本的に入りたくありません」「なぜかね」「金融業には、おやぢがひとめにあいましたから」「それは君が金融を誤解して来ないかと思っただけです。」「内定おめでとうい

います。と。 いまだに不思議です。後には僕が人事部にも行くんですが、そのとき女性行員に入行時の評価見ると聞かれて、初めは「いいよ」なんて言いつつ、結局見るといい。評価は1から5までで、4以上は、ぜひともやりたい人材なんです。僕はというと「3の下」でした。これは数合わせ、とりかかった人材が途中でやめに行ったりするんです。そういうときと呼ぶ。そんな評価ですね。 ——しかし、うれしかったんですよ。 ハンコ押し、本店の公衆電話からお客さんに電話しましたよ。第一勧業に内定したと言ったら「これは兵庫相互銀行より大きいのか」と聞きます。「ああ大きいみたいだ」と答えるか。今度は「寮はあるのか」と。あると答えたら「おまえはおとんから、そこの勤めなさい」と言われま

した。話していて、なんとなくね、ああ初めて親孝行できたんだと思っちゃった。(聞き手・小林伸行) ⑤

人生の贈りもの わたしの半生

作家 江上剛(61) ⑥

1億円のミスより叱られた50円のミス



入行1年目。第一勧業・大阪地区の体育祭で、支店のリレーチームの一員として優勝を果たす(右から)本人。思ったより直線伸びず、仲間からハッパをかけたらしい。(聞き手・小林伸行) ⑥

——初任地は。大阪駅のすぐ近く、梅田支店です。行員数100人弱、預金高は300億円弱で、しょ忙い支店です。毎晩残業。ストレスがたまりましたね。事務もへたくそでした。1万円の入金処理するところを、1億万円と記載しちゃったことがありました。通報を窓口に戻したら、「何やてんの」と。あわてるから直し方もまずくて、通報を1冊ダメにしちゃった。すると今度は窓口に出さないという。当時の今みたいに機械で自動的に振り分けるわけではないので、自分でなじみの窓口が選べたんです。 ——困りましたね。 なんとか来てもおどろくと思

って、お客さんが支店に入ってきたら、大声で「いらっしゃいませ」と言うことになりました。そうしてびびくりして、そのまま帰っちゃったお客さんがいた。それで今度は玄関までは静かにして、近くまで来たかと思ったら、あの、通帳や現金を入れるお皿があるでしょ、カールンと言っただけで、あれを誰よりも早く出した。「カールン」と音たてで勢いよく「カールン」が、台湾のメーカーに生産設備一式を売却するという条件を僕がとってきた。それで普通預金の口座に数億円の入金です。 ——外回りには、つから。一年たった頃です。早い方でしたよ。うれしくて、すぐ梅田の地下でカバンを買って、別の支店の同期に見せて行きました。担当は外国為替、でも営業全の中で付随的役割で、支店では軽く見られるもいままね。気分が悪かったと、どうもが職生のミス

——「カールン」が、台湾のメーカーに生産設備一式を売却するという条件を僕がとってきた。それで普通預金の口座に数億円の入金です。 ——外回りには、つから。一年たった頃です。早い方でしたよ。うれしくて、すぐ梅田の地下でカバンを買って、別の支店の同期に見せて行きました。担当は外国為替、でも営業全の中で付随的役割で、支店では軽く見られるもいままね。気分が悪かったと、どうもが職生のミス

——「カールン」が、台湾のメーカーに生産設備一式を売却するという条件を僕がとってきた。それで普通預金の口座に数億円の入金です。 ——外回りには、つから。一年たった頃です。早い方でしたよ。うれしくて、すぐ梅田の地下でカバンを買って、別の支店の同期に見せて行きました。担当は外国為替、でも営業全の中で付随的役割で、支店では軽く見られるもいままね。気分が悪かったと、どうもが職生のミス